23/8 2016 News Letter No.65 Japan Music Education Society

日本音楽教育学会ニュースレター 第65号

目　　次

1　学会からのお知らせ

1．日本音楽教育学会第 47 回大会（横浜大会）のおしらせ (第 3 報)..... 2

2．修士課程・博士課程の院生による「院生フォーラム」発表者募集 3

3．編集委員会からのおしらせ 4

2　音楽教育の窓

1．〈連載〉音楽・教育・学校（9）
図形楽譜でカンボジア教育支援―ボディパーカッション活動を通して―..... 山田　俊之 5

2．第 14 回国際音楽知覚認知会議 (ICMPC 14) に参加して ..... 安達真由美 6

3．世界中の研究者と過ごす充実の一週間
―ISME Preconference Seminar 参加報告 ―..... 駒　久美子・村上　康子 7

4．日本音楽表現学会第 14 回「メム」大会の魅力 ..... 宮本賢二朗 7

5．「音楽文献目録委員会」って何をする委員会ですか？ ..... 木間　英子 8

3　会員の声

1．教師への学び－音楽教育観と授業観察眼の育成－ ..... 小林美貴子 9

2．特別支援学校における音楽教育の充実をめざして ..... 杉尾　和美 10

3．日本音楽の面白さを伝えたい ..... 森田　都紀 10

4．会員の新刊・近刊等紹介 11

4　報告

1．平成 28 年度第 2 回常任理事会 12

5　事務局より 14

［編集後記］

1　学会からのお知らせ

1　日本音楽教育学会第 47 回大会（横浜大会）のおしらせ (第３報)

大会実行委員長　小川 昌文

日本音楽教育学会第 47 回大会（横浜大会）がいよいよ迫ってまいりました。前回のニュースレターからのアップデートを含めて，案内させていただきます。（詳細→ http://www.jmes2016.jp/outline.html）

10月8日(土)	9:30	12:30	13:30	14:00	15:15	15:30	15:45	17:15	17:30 18:25	18:30 20:00
	研究発表Ⅰ(A-H)	昼食	挨拶・記念演奏1	基調講演	休憩	記念演奏2	シンポジウム		総会	懇親会
	7号館1F-3F	7-101	6号館1F　101教室							第一食堂

10月8日(土)	11:30　13:30		15:30　17:00	
	院生フォーラム		プロジェクト研究Ⅱ 共同企画（Ⅰ-Ⅲ）	
	7号館1F		6号館・7号館	

10月9日(日)	9:00	12:30	13:30	15:00	15:15　16:45
	研究発表Ⅱ（Ⅰ-P）	昼食LC*	プロジェクト研究Ⅰ 共同企画（Ⅳ-Ⅷ）	休憩	共同企画（Ⅸ-XIV）
	7号館1F-3F	7-101	6号館・7号館		

10月9日(日)	11:30	13:30　16:30
	院生フォーラム	次世代育成事業（アウトリーチ）
	7号館1F	教育文化ホール 大集会室

＊ランチタイムコンサート

1．実行委員会企画について

1）基調講演（10 月８日　14:00 ～ 15:15　於：６号館 101）

講師：David J. Elliott ニューヨーク大学教授

演題：「プロフェッショナルな音楽教育者であること」

2）記念演奏

【Ⅰ】（10 月８日　13:45 ～ 14:00　於：６号館 101）

出演：望月太左衛と望月太左衛社中

演目：《鼓樂三番叟～和楽器で綴る世界遺産（能楽・歌舞伎・文楽）そして未来に！共に !! ～》

【Ⅱ】（10 月８日　15:30 ～ 15:45　於：６号館 101）

出演：川端りさリコーダーコンソート

曲目：クロード・ジェルヴェーズの曲３曲，アントニオ・ヴィヴァルディの曲１曲。

3）シンポジウム（10 月８日　15:45 ～ 17:15　於：６号館 101）

主題：「音楽と音楽教育の原点から音楽科の意義を再考する」

司会：安田寛，　シンポジスト：塚田健一，有元典文，小川昌文

4）アウトリーチ［横浜市との共催］(10 月９日 13:30 ～ 16:30　於：教育文化ホール)

内容：ミニコンサート（３団体)，Marissa Silvermann 氏のレクチャーの後，A.R.Rachman 曲の《Jai Ho》を，横浜インターナショナルスクール等アンサンブルの伴奏で，神奈川県立湘南高校合唱部，神奈川県立多摩高校合唱部，および聖光学院中学高校グリークラブが振りをつけて曲を仕上げていきます。

参加申込：会員は，事前申し込みにより参加可能ですが，収容人員に限りがあります。

申込〆切： ９月 20 日（火）

申 込 先：(半角で) jmesyokohama2016@excite.co.jp

2．会員の応募による口頭発表と共同研究

口頭発表は 2 日あわせて 16 会場で 99 本，共同企画はこれまでで最多の 14 本が発表されます。

3．常任理事会企画プロジェクト研究

【Ⅰ】学会から社会への発信（第 2 年次）－『音楽教育実践ジャーナル』から学校への発信－

【Ⅱ】若手研究者が考える音楽教育学の今後 －音楽教育学の学際性と専門性－

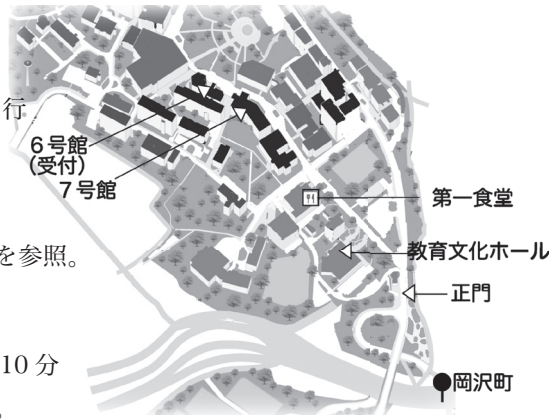
4．横浜駅西口から会場へのアクセスについて

以下のバスに乗車，「岡沢町」で下車。

・横浜市営バス 202 系統 循環外回り横浜駅西口行
（11 番のりば）

・相鉄バス浜 5 系統 交通裁判所経由横浜西口行
（10 番のりば）

詳細は大会プログラムおよび大会ホームページを参照。



横浜大会会場配置図

5．会場・施設について

受付は 6 号館ホワイエです。正門から歩いて約 10 分かかりますので，余裕をもってお越しください。

メイン会場は教育人間科学部 6，7 号館となります。

（横浜駅から案内係が誘導する予定です。

詳細はプログラム，およびホームページを参照）

6．昼食について

事前に弁当を申し込まれた方は，7 号館 1 階入口で 11:30 から 13:30 の間にお受け取りください。101 室が昼食会場となります。また，学会当日（8 日，9 日）は，第一食堂が 12:00 ～ 14:30 まで営業していますのでご利用ください。両日とも第一食堂の券売機で昼食券を 9:30 より購入できます。9 日には横浜国立大学生有志によるランチタイムコンサートが第一食堂において開かれます。お昼のひととき，是非聴きにいらしてください。

7．出展について（7 号館 1 階ロビー）

今大会では 14 社が学会開催期間中会場にて出展予定です。新規出展も 3 社となり，楽器（電子楽器，教育楽器，諸外国の楽器を含む），楽譜，など多彩な出展内容となっています。

8．その他

懇親会終了後は，第一食堂前より横浜駅経由中華街まで臨時シャトルバスが運行されます。

2. 修士課程・博士課程の院生による「院生フォーラム」発表募集

引き続き〆切の 9 月 8 日（木）まで受け付けています。件名：「院生フォーラム申し込み」と記して次のアドレスへお申し込みください。（全角で）forum.music.2016@gmail.com

担当：池田枝里奈（学芸大院生），井辻　冴聡（横国大院生），原田　知佳（横国大院生）

3. 編集委員会からのおしらせ

編集委員長　有本 真紀

5月29日に開催された第２回編集委員会では，主に以下の審議を行いました。

① 投稿原稿の採否について：『音楽教育学』への投稿は，研究論文５本のうち２本が採択，３本が再査読となり，研究報告２本と論考１本は不採択となった。『音楽教育実践ジャーナル』では，旧規定による投稿が５本あり，論文４本のうち１本が再査読，３本は不採択，報告１本は特集として採択となった。新規定にもとづく投稿は11本で，特集投稿６本中２本が採択，４本が不採択，自由投稿５本中３本が採択（うち２本は特集として），２本が不採択となった。

② 書評と書評論文の区別を明確にするため，投稿規定の改正案を検討した。

③ 投稿者が原稿についてアピールできるよう，投稿申込書に「研究の学術的な特色・独創的な点及び意義」（記入は任意，200 ～ 300字）の記入欄を設けることとした。

次回の投稿締切は，『音楽教育学』が11月15日，『音楽教育実践ジャーナル』は2017年２月15日です。会員のみなさまの，積極的な投稿をお待ちしております。特に，横浜大会で発表予定の方は，ぜひ，学会誌への投稿を見据えて発表準備を進めていただきますようお願いいたします。

原稿募集

『音楽教育実践ジャーナル』通巻28号（2017年12月発行）の特集テーマ

★特集１「０．１．２歳児と音楽教育」　★特集２「音楽系の部活動と音楽教育」

詳しくは，同封のチラシ，学会ホームページをご覧ください。

テーマにかかわらず，自由投稿も歓迎いたします。

『唱歌の情景――《うさぎ》』

2　音楽教育の窓

1 〈連載〉音楽・教育・学校（9）
図形楽譜でカンボジア教育支援—ボディパーカッション活動を通して—

山田 俊之（九州女子短期大学）

昨年 12 月，JHP「学校を作る会」および，津田正之文部科学省教科調査官が支援されているカンボジア教育省カリキュラム編成局主催の教育支援プロジェクトに参加した。プロジェクトの活動の中で私は，カンボジアの公立小学校でボディパーカッション教育の方法についての教員研修と児童へ公開授業の指導を行った。

カンボジアでは，1975 年から 1979 年のポル・ポト政権によって「教育制度」が廃止され，教育問題が未解決のままである。設備面では約 8 割の小学校で電気が通っていない。実際，プロジェクトで参加した学校にも電源がなかった。また，音楽等の芸術教育分野においては楽器を含む設備・機材等はほとんどなく，そもそも「音楽」という教科もない。

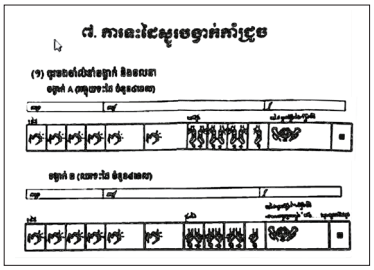
このプロジェクトに参加したきっかけは，一昨年に津田調査官が「カンボジアは非常に劣悪な環境だが，芸術教育の充実に努めようとしている，そのため JHP「学校を作る会」，カンボジア教育省カリキュラム担当者の方々が熱心に取り組み，（中略）何よりもピュアな瞳の子供の姿が忘れられません」と言われ，是非協力したいと考えたことにある。早速，ボディパーカッションの教材（書籍，DVD 教材）を，JHP スタッフを通じてカンボジア教育関係者に送った。

私は，25 年以上，現職教諭として小学校，特別支援学校（知的障害，聴覚障害）の教育現場でボディパーカッション教育を取り組んできた。私はこの活動を通して“楽譜が読めなくても，楽器がなくても，歌が苦手でもすべての子どもが楽しめる”ことを目指した系統的なボディパーカッション教育の価値を痛感し，私の経験が生かされるのではないかと直感的に感じたのである。

カンボジアで障壁になったのは楽譜である。日本の教師であれば，簡単な楽譜を掲示して教えることができる。しかし，カンボジアの教師は，五線譜を読む音楽教育を受けていないため楽譜をほとんど理解できない。そのため，クメール語（カンボジア語）に翻訳した書籍や資料を見ることはできても，映像を見ないとリズムの重なりは理解できない。そこで，昨年 12 月にカンボジアに行くまでに図形楽譜の冊子を作り，それを提示して指導することにした。結果は，予想をはるかに超えるものであった。

写真①は昨年 12 月にカンボジア公立学校教員研修と公立小学校及び児童養護施設で行った公開授業の写真であり，写真②はその時に用いた図形楽譜である。手拍子やひざ打ちはイラストで理解でき，掛け声や動作もわかる。世界中の言語が違う子ども達がボディパーカッション活動を通して“楽器がなくても，楽譜が読めなくても，一緒に音楽を楽しめる”と実感できた授業であった。

①カンボジアの小学校（コントラバイク郡）公開授業



②筆者が作成したクメール語によるリズム譜

2. 第 14 回国際音楽知覚認知会議 (ICMPC 14) に参加して

安達真由美（北海道大学）

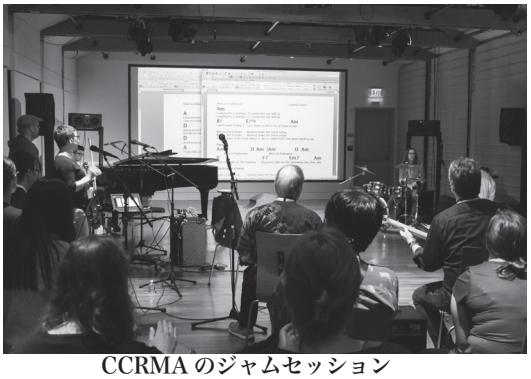
2016 年 7 月 5 ～ 9 日にサンフランシスコのハイアット・リージェンシー・ホテルにて “ICMPC 14” が開催された。期間中天候自体は悪くはなかったが思ったよりも気温が低く，日本なら北海道でも 7 月にこんなものは着ないだろうと思うような ARC’TERYX のウィンドブレーカーと Patagonia の防寒チョッキを購入し，期間中愛用する羽目になった。

ICMPC は音楽に関する主として実証研究を対象とした学際的な国際学会で，二年に一度開催される。アジア太平洋，北中南米，欧州の三つの地域が順番で開催を担当している。今回は北米の SMPC (The Society for Music Perception and Cognition) が主催し，カリフォルニア大学サンフランシスコ校の Theodore Zanto 氏が大会委員長として運営を統括した。例年，ICMPC は ISME と開催年が重なるため，音楽教育関係者の多くは ICMPC には参加しないようである。今回も，私が出会った日本からの参加者は皆，音楽教育が専門ではなかった。そこで，もう何年も幽霊会員のようになってしまっているとはいえ，日本音楽教育学会会員を続けている私から本会議の概要を簡単にご報告させていただく。

会議は，5 日午前 9 時のオープニング基調講演を皮切りに，9 日午後 5 時の締めの基調講演まで盛りだくさんのプログラムで，基調講演とポスター発表以外は 4 部屋同時進行で行われた。毎回のことながら，この学会で取り上げるトピックは広範囲である。セッション数が多かった順にトピックを列挙すると次のようになる。：音楽と言語，演奏，音楽と神経科学，音楽と感情，音楽と動き，音楽的発達，記憶と音楽，音楽認知モデル，音楽と健康・ウェルビーイング，音楽・健康・科学・産業，音高・調性知覚，リズム・拍子・タイミング ，美学的知覚と反応，音楽社会心理学，音楽教育，認知音楽学，音楽認知の歴史 ，音響学と精神物理学，音色，音楽と意味，作曲と即興，音楽と性格，音楽療法，音楽の異文化間研究，音楽知覚認知の異種間比較。

これらのトピックのうち，私は，音楽的発達，音楽社会心理学，演奏，音楽と性格，音楽と動きなどを中心に参加した。特に，私自身が歌唱に関する国際共同研究 AIRS に関わっていることから，歌唱能力の測定法について，異なる視点から複数の発表が聞けたことは収穫であった。また，早期音楽教育や乳児期における音楽への接触方法が乳幼児の歌唱能力や社会性の発達に影響を与えること，音楽演奏に限らず誰かと一緒に同じタイミングで動くこと（例：ブランコ）で子どもの協調性が向上することなど，音楽や子どもの遊びの持つ発達的意義に関する新たな知見も興味深かった。

最終日，オーガナイザーである Zanto 氏に伺ったところ，650 件の発表申請の約 8 割が査読に通り，プログラムに掲載された演題は約 520 件程度，口頭発表とポスター発表の件数の比率は 1:1 だったとのこと。欧米では，口頭発表でないと旅費支援がなされないなどの制約があるため，より多くの口頭発表が組み込まれるよう，通常の 30 分枠に加えて 15 分枠も設けられていた。学会登録者は 32 か国から 550 人を超え，14 回の ICMPC の中でも最大規模であった。4 日目の午後には，サンフランシスコ湾からダウンタウンを一望できるランチクルーズや，スタンフォード大学 CCRMA (The Center for Computer Research in Music and Acoustics) のラボ見学，ジャムセッションなどのイベントも行われた。



CCRMA のジャムセッション
（写真提供：東京大学 岡野真裕氏）

最後に，情報のデジタル化に伴い ICMPC 14 のプロシーディングスもウェブからアクセルすることができる。上記トピックにご興味のある方はぜひご覧になっていただきたい。URL: http://www.icmpc.org/icmpc14

3. 世界中の研究者と過ごす充実の一週間―ISME Preconference Seminar 参加報告 ―

駒 久美子（和洋女子大学）　村上 康子（共立女子大学）

ECME 会場の Akoesticum（オランダ）

2016 年 7 月 17 日から 22 日にかけて，オランダの Ede で ISME の Preconference Seminar のひとつ Early Childhood Music Education（ECME）が行われた。基調講演２本，シンポジウム２本, ワークショップ４本, 口頭発表９本, ポスター発表９本のほか，各国の子どもの歌を紹介する時間や，チャイルド・ケア・センターの訪問，半日のエクスカージョンなどのプログラムから成る。参加者は約 60 名とのことであった。ISME の本大会と異なり少人数で行われるので，並行していくつもの発表が行われることは無い。

そして，音楽教育の中でも幼児教育を専門とする研究者が集まること，プログラムの中にブレーク・アウトセッションや一日の振り返りなどが設けられていること，さらに，ほとんどの参加者が同じ場所で宿泊するので，朝食から夕食後に至るまで様々なテーマでディスカッションが続けられ，世界中からやってきた研究者たちと充実の一週間を過ごすことができた。

英語に不慣れな我々を研究仲間の一人としてとらえしっかりと意見を聞いてくれる。その懐の深さに助けられ，非常に楽しく過ごした。その一方で，研究テーマの絞り方，研究手法に対する探求心など，日本人研究者の質の高さを感じることも少なからずあり自信を持てた部分もある。世界各国の研究者と交流を深められる良い機会。自分自身をブラッシュアップさせて次回また参加できるよう努めたい。

4. 日本音楽表現学会第 14 回（メム）大会の魅力

宮本賢二朗（浜松学芸高等学校）

旭川空港から市内へと向かうバスの車中。モニターに観光案内が流されており，旭山動物園のカバが水中を泳ぎまわる姿が流れている。その優雅さに驚嘆し見とれつつ６月にしては肌寒い旭川駅に到着しました。

６月４日と５日両日に拓殖大学北海道短期大学で行われた日本音楽表現学会大会では, 演奏法, 解釈, 分析, 教育実践，海外の動向など多岐にわたる発表に接することができました。常々感じているのですが，音楽，あるいは音楽教育と一口にいってもそのジャンルは多様です。この学会に「表現」という広い視点から集う方々との横断的な交流は非常に刺激的で，私の視野を広げてくれる貴重な場でもあります。

旭山動物園園長の坂東元氏による基調講演「動物の声を聞く」は，一見音楽とは関係ないように思われる動物の話から，表現を引き出すことの本質を描き出す感動的なものでした。シンポジウム「人間の声を聞く－人が歌う時」（寺内大輔・小西潤子・佐々木正利）もそれぞれの分野から歌うことに迫るもので，その後の質疑応答には会場からも活発な意見が出されました。こういった学術的な催しに加え，総会までもがまるで同窓会のように明るく和やかな雰囲気で行われるのもこの学会の大きな魅力です。

坂東氏の「動物はそれぞれ驚くべき能力を持っているが，人間がそれに気がつかないでいる。カバがあのように華麗に泳ぎ回ることができるとは誰も想像していなかったのだ」という言葉に心打たれつつ私は，教育に携わる者としてまだまだ未熟であることを痛感しました。興味がありながらも聴講できなかった発表もありましたが，後日発行される学会誌『音楽表現学』で各発表の様子がまとめられるので今から楽しみにしています。

5. 「音楽文献目録委員会」って何をする委員会ですか？

音楽文献目録委員会委員　木間 英子

日本音楽教育学会ニュースレターには「音楽文献目録委員会」の委員依嘱や委員会報告が掲載されています。しかし，この委員会がどのような委員会か，ご存知でしょうか？委員会には次のような質問が寄せられていますので，この場を借りてお答えさせていただきます。

Q.「音楽文献目録委員会」とはどのような組織ですか？

A.「音楽文献目録委員会」は，「日本音楽教育学会」内の組織ではありません。国内の音楽関連５団体（日本音楽学会，東洋音楽学会，日本音楽教育学会，音楽図書館協議会，国際音楽資料情報協会日本支部）から各３名ずつ選出された委員と事務局からなる組織で，1967 年に発足しました。

Q.「音楽文献目録委員会」の役割は何ですか？

A. 役割は二つあります。一つは，日本国内で発表された音楽関係の著書，翻訳書，論文，書評などを収集し，その中から学術的な研究に資する文献について書誌情報を取りまとめ，年１回『音楽文献目録』を刊行すること。もう一つは，「国際音楽文献目録委員会」〈通称 “RILM”(リルム) (Répertorie International de Littérature Musikale)〉の日本支部としての役割です。“RILM” はあらゆる言語で刊行された，音楽文化に関する学術的な文献の国際的な書誌目録を作成する学術的ネットワーク組織です。RILM の文献データベース “RILM　Abstracts of Music Literature” (『RILM 国際版』) は，1999 年までは印刷物として刊行されていましたが，現在は，毎月更新される有料オンライン・データベースとなっています。国内の「音楽文献目録委員会」は，『音楽文献目録』に掲載された文献の中から，博士論文を含め学術論文を中心に選定して，書誌や抄録を英語に翻訳し RILM 国際本部に送っています。

Q. 文献検索は，近年，オンラインで気軽にできるようになっていますが，『音楽文献目録』で文献を探すこととの違いを教えて下さい。

A. J-STAGE (Japan Science and Technology Information Aggregator, Electric) と Cinii(Citantion Information by NII) を例にとってみましょう。J-STAGE は，科学技術振興機構が提供する検索サイトで，J-STAGE に登録された学会誌の内容をキーワード検索し，抄録や本文を読むことができます。Cinii は，国立情報学研究所から提供されている検索サイトで，雑誌，大学等で発行されている研究紀要に掲載されている論文等を検索することができます。キーワードがタイトル等に含まれていれば網羅的に文献を探し出すことができますが，音楽と関連のない分野の学術誌や商業誌のコラムまでピックアップされてしまい，文献の絞込みがさらに必要です。

一方,『音楽文献目録』は音楽文化あるいは関連する分野にまたがる学術的な文献（著作を含む）に限定した書誌目録で，ジャンル別に掲載されています。自分が調べたい文献群に早く辿り着くことができますし，ジャンル全体の最新の研究の動向を見ることができます。また修論･博論（抄録付き）も掲載されており，音楽研究の資料情報を共有しながら音楽研究の全体像を把握することができます。索引を使って検索する以外にも，冊子体の特性から，索引に掲載されている様々なキーワードに目を通すことができますので，類似した内容の新たな文献の発見につながります。

Q.『RILM 国際版』のように，『音楽文献目録』にオンライン・データベースはないのですか？

A. 現在，パイロット版として，直近 10 年分の書誌情報をデータベース化して，冊子体定期購読者が閲覧できるようにする準備を進めています。準備が整ったらまたお知らせしますね。

3　会員の声

1. 教師への学び－音楽教育観と授業観察眼の育成－

小林美貴子（北海道教育大学札幌校）

教員養成課程の学生に音楽教育を指導していて，「4 年間で学生に何を学ばせ，教師の入り口に立たせるか」を常に意識している。日々模索している「理論と実践をいかに結びつけるか」ということは，音楽教育学で従来から言われていることであり，教員養成教育の課題でもある。

音楽教育学の諸理論を基盤とする視点を通して教育実践を見る目を養うことによって，授業実践から音楽教育の本質を考えることができるようになり，音楽教育の理論を援用して具体的な教育実践を展開できるようになると考える。このようなことを目指して，特にここ数年，音楽科の授業分析図の作成およびディスカッションを継続的に行っている。

北海道教育大学に着任して 1 年が経った頃，数学教育の教員が担当する 1 年次生の授業を見学する機会があった。そこでは，学生たちが近隣の小学校を訪問し授業観察した時の「気づき」を持ち寄り，数名ずつのグループに分かれて，「気づき」にもとづきディスカッションを交えて授業分析図を作り上げていた。また，完成させた授業分析図に関するプレゼンテーションも行っていた。各々の学生が「気づき」を仲間に伝え合うこと，すなわち他者と「気づき」を共有することで，授業を観察した時には気がつかなかったことを知ることができる。そして，「気づき」を整理しながら授業分析図を作成することで，授業の特徴を捉えることにつながる。さらに，授業の課題点を把握し，1 年次生なりに改善案を検討することができる。1 年次生の学びを見学しながら，率直に，自分が担当する授業でも導入したいと感じた。

それ以来，教員養成課程に所属する 1 年次生から 4 年次生を対象として，小中学校音楽科の授業分析図の作成およびディスカッションの機会を設けている。

上級学年になり音楽教育の諸理論を学び，教師への学びも深まると，授業観察時に目の前で起きている事実を捉えるだけでなく，授業を構想した教師の意図を推察したり，授業改善の方法を考案したりすることができるようになる。このことは，教員養成教育では容易に想像できることではある。ところが，授業分析図の作成やディスカッションを繰り返すことで，1 年次生であっても，授業のよかった点だけではなく，改善すべき点を見つけることができるようになる。また，教師の視点だけに着目していた学生が学習者の視点に立てるようにもなっていく。さらに，観察した授業の実践者である教師と学生がディスカッションする場を設定することによって，教師の意図を確認したり，教師の授業観に直接触れたりすることで，音楽教育実践の奥深さを知ることになるのである。

このように，個人の「気づき」を出発点とした授業分析図の作成とディスカッションは，学生の音楽教育観を拡大する契機になっており，音楽科の教員養成教育において豊かな可能性を有している。

授業分析図作成の様子

2. 特別支援学校における音楽教育の充実をめざして

杉尾　和美（沖縄県立大平特別支援学校）

沖縄県の特別支援学校音楽科教員として，特別な支援を必要とする子ども達への音楽教育に長年関わってきましたが，数年前に現職教員として大学院に入学し，障害児を対象とした音楽教育に関する研究に取り組む機会を得ました。そこで改めて感じたことは，音楽科指導の原点は対象の子どもの如何に関わらず同じであること，教員は専門性向上のために視野を広げる努力を継続する必要があるということです。

特殊教育と言われた時代から特別支援教育へ制度転換され，どの学校種においても「合理的配慮」が義務である時代となりました。沖縄県の特別支援学校にも，知的障害と肢体不自由の併設校や，小学校や高校での分教室設置など，様々な形態が年を追うごとに増えています。また，特別支援学校における軽度知的障害児の増加や幼児児童生徒の実態の重度・重複化，ニーズの多様化などに対応をせまられています。

このような状況に対応するために，全国的なレベルの実践や知見に触れることによって自らの知見を深め，可能ならば自らの考えや実践内容を発表する機会をもちたいと考え，入会させていただきました。今後は，会員の皆様の研究から多くのことを学ばせていただき，特別支援教育における音楽教育の楽しさと重要性を，多くの人に感じてもらえる取り組みを進めて行きたいと思っています。会員の皆様，どうぞよろしくお願い申し上げます。

3. 日本音楽の面白さを伝えたい

森田　都紀（京都造形芸術大学）

皆様，はじめまして。私はこれまで音楽学の領域にて日本音楽の理論的研究を行なって参りました。入会の直接的なきっかけは，もう何年も前のことに遡ります。その頃，私は日本学術振興会特別研究員として東京学芸大学に所属し，専門の研究を進める一方で，音楽教育のゼミにも参加させていただいていました。それまで音楽学の領域で音の鳴り響きの歴史的な変遷を扱っていたので，音楽を子どもたちの教育のために捉えることに初めは少し戸惑いましたが，音楽教育と音楽学は領域こそ異なれども，音楽の伝承を考えることにおいて同一線上にあることを学ばせていただきました。それ以来，日本音楽の理論的な研究を教育の場に活かすことができればという思いを強くするようになりました。

私は現在，アートデザイン分野の人材育成を掲げる大学で，芸術学を学ぶ社会人学生に教えておりますが，日本音楽は日本音楽は子どもだけでなく，社会人である大人にとっても馴染みの薄いもののようです。出会いというのは幼い時期に限らず，何歳になってもあるものだと思いますので，まずは日本音楽を面白い！と感じられるような場を育み，子どもから大人まで，生涯教育という視点からも関わっていければと思っています。皆様とご一緒に有意義な活動に参加させていただきたく，今後ともよろしくお願い申し上げます。

4. 会員の新刊・近刊等紹介

★吉永 早苗著　無藤 隆監修『子どもの音感受の世界―心の声を育む音感受教育による保育内容「表現」の探求―』萌文書林　2016/1/21　B5 変形版・272 頁　ISBN 978-4-89347-229-8　［本体 2,000 円＋税］　幼児期の音楽表現の指導法について具体的に提言する。楽音や身の回りの音を聴き，印象を持ち，共鳴し，感情を体験し，連想を展開させる子どもの音感受の実態を，観察調査と実験を介して実証的に確かめた。

★安藤 政輝編『宮城道雄童曲集 1 （五線譜付）』

甲楽出版　2016/6/25　AB 版・32 頁　ISBN 978-4-908919-13-8 C0073　［本体 1.200 円＋税］
宮城道雄没後 60 年, 葛原しげる生誕 130 年を記念して, 宮城作品の 1/4 を占める「童曲」の楽譜集。ページの右に絃名譜，左に五線譜を掲載。第 1 集は「大人が伴奏して子どもが歌う」曲の中から調絃が黄鐘（A）を基準とする《チョコレート》《狸の泥舟》《春の雨》など 10 曲を収載。

★梅沢 一彦編著『小学校指導法 音楽 (教科指導法シリーズ) 』

玉川大学出版部　2016/2/19　B5 版・230 頁　ISBN 9784472405181　［本体 2,000 円＋税］
「学習指導要領」を読み解き, そのポイントを整理。指導案を中心に指導内容や指導方法を解説し，具体的な楽曲を提示した。そのまま実践で使用できるような新しい教科指導のあり方をデザインした。

★野本由紀夫 著『クラシック名曲のワケ：音楽授業に生かすアナリーゼ (音楽指導ブック) 』

音楽之友社　2016/1/26　B5 版・104 頁　ISBN 9784276321595　［本体 2,300 円＋税］
本書は，小・中・高の鑑賞授業で扱われるクラシック音楽を取り上げ，音楽学者・野本由紀夫流のアナリーゼを解説した一冊。「なぜこのメロディは美しいのか？悲しいのか？」など，その根拠を楽譜や楽器法，歴史から読み解いていく。アクティブ・ラーニングにも対応。

★伝統音楽普及促進事業実行委員会編（奥忍他）『DVD「能は面白い！」』［本体２枚組］

文化庁 2014/2015 年度助成伝統音楽普及促進支援事業　協力：同志社大学経済学部創造経済研究センター　［実費 500 円＋送料で頒布］「能」を授業で実践できることを目的に能楽師と研究者，学校教員が協力して作成。「入門編」には能表現についての視点を提示，「実践編」では「船弁慶」全編の映像と部分的な教材用映像を提示。学習指導案を含む。問合先：denonhukyu@gmail.com

紙媒体の NL の問い合わせ先に間違いがありました。正しくは上記です、↑

…—…

「ニュースレターは会員のホットな情報交換の場」の方針の下，この頁ではみなさまからの投稿をお待ちします。書籍の他，CD，DVD などのリリースもお寄せ下さい。書誌情報，基本的な音源情報に加えて「である調」90 字程度の紹介文をお願いします。

投稿先アドレス ☞（半角で）ｏｎｋｙｏｕｉｋｕ．ｋｏｕｈｏｕ@ｇｍａｉｌ．ｃｏｍ

4　報　告

1.　平成 28 年度第 2 回常任理事会

日　時：2016 年 7 月 17 日（日）14:00 ～ 16:40

場　所：聖心女子大学　音楽室

出席者：小川，今川，権藤，今田，奥，加藤，菅，杉江，坪能，寺田（記録），三村

【会務報告】〈2016 年 4 月 18 日以降〉

4 月 18 日	第 47 回大会 横浜国立大学表敬訪問	6 月 30 日	ニュースレター第 64 号・第 14 回音楽教育ゼミナール案内他 発送
5 月 29 日	第 2 回編集委員会（立教大学）		
6 月 19 日	第 47 回大会発表申込締切	7 月 17 日	第 2 回常任理事会（聖心女子大学）

【審議事項】

1．平成 28 年度補正予算，平成 29 年度予算について（島崎・寺田）

- 7 月 7 日現在の正会員実数に基づく提案を受け，承認した。平成 28 年度補正予算案では，大会運営費中，準備金としての大会実行委員会経費の性格の明確化，事務局経費の内訳が検討された。
- J-STAGE への登載については，新規発行分の電子化は学会誌費，バックナンバーは学会基金から支出して 2 年間で登載を完了することが承認された。
- 倫理ガイドブックを修正して増刷（300 冊）することが認められ，研究出版基金に計上した。
- ゼミナール・ワークショップ基金については，本年度補正予算案では例年通りゼミナール補助金として 30 万円を計上するが，開催順や回数に柔軟性を持たせることによって支出経費の予測が不透明となっていることが指摘され，今後留意していくこととなった。
- 平成 29 年度予算案については，平成 27 年度の会費納入率の低さもあり収入が少なく，予備費も例年に比べて少ない状況であるが，会費納入の働きかけ等も含めて今後改善を図ることになった。

2．第 47 回大会について（報告も含む）

- 大会プログラム，口頭発表・共同企画について，今田・坪能企画担当理事から報告があった。研究発表 99 件，共同企画 14 件で，例年に比べて共同企画の件数が多い。
- プロジェクト研究について，加藤常任理事，今田・坪能企画担当理事より報告があった。プロジェクト研究Ⅰでは，今まで積み上げてきた学会の資源を活かすという視点から，実践ジャーナル掲載の実践研究の分類と会員への Web 上でのアンケート調査を実施して傾向を探る。第 1 回理事会後に ML 会議で実施が承認されたプロジェクト研究Ⅱ「若手研究者が考える音楽教育学の今後－音楽教育学の学際性と専門性－」では，常任理事会企画として，若手研究者からの提案をもとに広い視野に立った学際的な議論を行う。以上の内容を承認し，プログラム要旨の修正・確認を行った。
- 同時開催の会場数が多いため，研究発表者が持参する資料数を今年度は「50 部以上」に変更した。
- 小川会長からは，総会で 50 周年準備ＷＧについて報告することが提案され，承認された。
- 学会誌での大会報告については，杉江編集担当理事から，編集委員会での審議と『音楽教育学』第 46 巻第 2 号編集状況報告を受け，発表数が急増している共同企画の報告を 1 件につき 2 頁とすることになった。なお，学会誌への投稿数が少ないので，昨年度大会での司会者へのアンケート調査もふまえ，今年度も引き続き司会者から研究発表者への投稿の声掛けを実施することが承認された。

3．「大会開催についての学会本部と大会実行委員会との覚え書き」の改訂について（小川）

大会準備の過程で，現行の覚え書きが多様に解釈されている状況がある。より具体的な明記など，改訂する方向で検討する。会長と事務局長で原案を作成し，次回常任理事会で提案する。

4．第 14 回音楽教育ゼミナール（目白ゼミナール）について（坪能・今田）

準備事項を軽減して HP 等で広報するとともに，多方面に参加をよびかけることにした。

5．規定の改正について（加藤・三村）

国際交流担当の専門性に鑑み，国際交流委員会規程第 4 条を「委員は任期を 2 年とし，原則として連

続２期を越えないものとする。」に改正する案が承認された。「会員の権利に関する内規」については，団体・特別・賛助の各種会員の権利等について種々議論され，継続審議となった。

６．平成 30 年度第 49 回大会開催校について（小川）

第 50 回記念大会を東京で開催することを視野に入れつつ，第 49 回大会開催校を検討する。

７．新入会員および退会者について（権藤）

新入会員及び退会者の報告がなされ，承認された。

この部分は個人情報を含むため削除しています。

９．訃報について（奥）

会員の訃報については，学会に報告があった場合には物故者の氏名のみ掲載することとなった。

【報告事項】

１．各委員会報告

- 編集委員会（杉江）

『音楽教育学』投稿規定の改正案（書評と書評論文の区分，論考を含めた英語表記），投稿申込書の様式変更，査読者への査読依頼文の改訂，学会誌への投稿状況 他が報告・了承された。

- 広報委員会（奥）

ニュースレター第 65 号編集の進捗状況について報告された。

- 文献目録委員会（木間→権藤）

6 月 25 日開催の委員会報告がなされた。なお，ニュースレター次号で業務の紹介が行われる予定。

2．50 周年準備WG報告（今川）

会議名称を「50 周年記念出版準備ワーキンググループ」とし，音楽教育の未来を見据えた書籍の出版にむけた議論を進めることにした。8 月末には基本コンセプトを決定し，総会で報告する。

3．日本学術会議「東日本大震災に関する学術調査・研究活動に関するアンケート」（権藤）

日本学術会議事務局より標記調査への協力依頼があった。HP 等で会員に周知を図った。

※　次回会議の予定

第 3 回常任理事会・第 2 回理事会　10 月 7 日（金）時間未定　於：横浜国立大学

5　事務局より

事務局長　権藤 敦子

1）第 47 回大会まであと 1 か月となりました。皆様のご参加をお待ちしています。

- **Web 上の事前参加申込みは 9 月 9 日（金）20 時まで**です。16 日までに入金が確認できない場合には参加費が割引となる事前申込み扱いにはなりませんので，まだの方はお急ぎください。
  →日本音楽教育学会 HP ＞イベント案内＞大会のお知らせ＞第 47 回大会＞「口頭発表」申込・大会参加
  https://conv.toptour.co.jp/shop/evt/YOKOHAMA47/
- **懇親会・弁当・宿泊申込→** https://conv.toptour.co.jp/shop/evt/YOKOHAMA47/
- **総会の出欠**について，同封のハガキにご記入の上，9 月 20 日（火）必着でお知らせください。総会に欠席される方は，必ず委任状に必要事項をご記入の上お送りくださいますようお願いいたします。

2）『音楽教育にかかわる人の倫理ガイドブック』増刷に伴い，軽微な修正を行います。お気づきの点などありましたら，事務局までお知らせください。

【編集後記】

この 65 号がお手元に届く頃には，暑さが少しはやわらいでいるでしょうか。

今号では，国内外で行われた学会の高揚感あふれる参加報告を頂きました。また，「文献目録委員会」からは，この学会での位置づけや役割，『音楽文献目録』の独自性などについて，分かりやすい Q&A 方式で寄稿して頂きました。

さて，お気づきの方もいらっしゃると思いますが，今年度の 64 号からデザイン等を変更してお届けしております。HP のニュースレターには目に優しい緑色を使用して，カラフルに仕上げました。会員の方からは「文字間隔等を広くするなどのレイアウトの工夫がされていて，見やすくなった」「ヘッダーがついているのでわかりやすい」といった感想を頂いております。これからも，読みやすくてたくさん情報を得られるニュースレターをお届けできるように，工夫しながら進めてまいります。夏休みには勉強会やワークショップなど，様々な体験をされる方も多いと思います。会員の皆様，ぜひ夏休みのご経験や，ご意見をお寄せください。　（山中和佳子）

投稿先アドレス☞（半角で）ｏｎｋｙｏｕｉｋｕ．ｋｏｕｈｏｕ@ｇｍａｉｌ．ｃｏｍ

【日本音楽教育学会事務局】
所在地：〒 184-0004 東京都小金井市本町 5-38-10-206
TEL & FAX：042-381-3562　E-mail：（半角）ｏｎｋｙｏｉｋｕ@ｒｅｍｕｓ．ｄｔｉ．ｎｅ．ｊｐ
私 書 箱：〒 184-8799 東京都小金井郵便局私書箱 26　＊郵便物は私書箱へ
開局日時：月・水・木　9：00 ～ 15：00
事務局員：亀山さやか・若尾裕子・中村幸子